



JAPAN URBAN DESIGN  
INSTITUTE

## 都市環境デザイン会議

東京都渋谷区広尾1-10-4  
越山LKビル内150

TELEPHONE 03-5420-5995  
FACSIMILE 03-5420-5996

# JUDI NEWS

011 APRIL 20.  
1993

発行者

都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

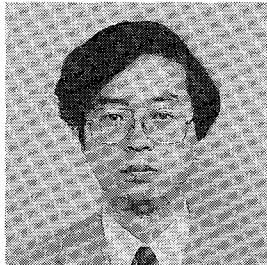
●論説／地球にやさしい都市づくりが求めるもの	1
●特集／エコロジーと都市環境デザイン 都市	
1. エコロジカルな都市計画の行方	2
2. 建築と環境の関係	3
3. エコロジカル・インフラによる 都市環境のデザイン	4
4. エコロジー問題と都市	6

●事例シート	
六甲23（ヴァントア）	7
札幌ロマネット、南塚口まちかど広場	8
●ブロック例会レポート	
関東4ブロック合同例会報告	9
関西ブロック・都市環境デザインセミナー報告	10
●お知らせ	
代表幹事会より	12
事務局より	12
編集後記	12

## 地球にやさしい都市づくりが求めるもの

### 論説

沢木 俊罔  
TOSHIAKI SAWAKI  
広報・出版委員



ここ数年、エコポリス、エコシティ、エコロジカルデザイン、環境共生住宅など、地球環境にやさしい都市づくりを進めることができることが必要であるとの認識が深まりつつあり、そのための研究、提案が多く見られるようになってきました。これらは、省エネルギー、省資源、自然環境の保全・育成などに配慮した都市づくりをめざすものであり、エコロジーは、一時的なファッショントレードオフの視点であることは間違いないと思われます。

では、都市環境デザインとエコロジーとの具体的なかかわり方について、どのような場面が想定できるのでしょうか。まず、省エネルギー、省資源の視点と都市環境デザインとのかかわり方を考えてみると、例えば、景観デザインにおける透水性舗装や耐久性の高いストリートファニチャの導入、建築デザインにおける屋上緑化や太陽エネルギーを利用するための各種装置のデザイン処理の仕方、アーバンデザインにおけるヒートアイランド現象の解消に効果的な、風の道に配慮した幹線道路網計画や公園緑地の配置計画のあり方など、それぞれの分野でさまざまななかかわりが生じてきます。

また、リサイクル可能な材料や地場の材料の利用、コンクリート型枠用合板の問題など都市環境をつくり上げる過程で、さらにライトアップや水のポンプアップのためのエネルギー源の問題、アトリウムの空調の問題、公共交通機関の利用促進などでき上がった都市環境が機能する段階でのなかかわりのように、都市環境形成の各段階においても省エネルギー、省資源とのかかわりが生じてきます。このような、省エネルギー、省資源のためのさまざまな戦略が都市環境デザインを含む都市づくりのすべての場面で求められています。

次に、自然環境の保全・育成という視点でみると、従来からの都市環境デザインにおいても行われてきた豊かな植栽、水路・運河の再生、親水護岸の整備といった人工化された自然環境の形成に

とどまらず、都市内のあらゆる場所でのビオトープの形成、河川（水辺）の自然性の復元、潜在自然植生の再生、裸地（非舗装面）の確保、原地形の保全など、より自然に近い自然環境の創造へと向かっています。すなわち、都市環境の中で、このようなより自然に近い自然環境の保全・育成を図りつつ、デザインに取組むことが要請されています。

以上のように、都市環境デザインの多くの場面で、エコロジーとのかかわりが避けられなくなりつつありますが、ややもするとエコロジーへの配慮自体が最終的な目的となり、その結果できあがる都市環境がどのようなものになるか、という視点を見失う危険性もはらんでいます。また、エコロジーのいくつかの要素は互いにトレードオフの関係にあるため、ある要素に配慮したつもりが、他の要素にはかえってマイナスに働くということも多く、エコロジーの分野での解決を待たなければならない部分も残されています。

地球環境に配慮した都市づくり自体が、まだ途についたばかりの段階ですが、一日でも早い対応が迫られている問題である以上、われわれも、都市環境デザインに携わる立場で、できることから始めるべきだと思います。

エコロジーに関する多くの情報が飛びかうなかで、われわれがデザインの前提として考えておかなければならぬことを知るとともに、われわれサイドからも、エコロジーに配慮した都市づくりにデザインの視点をどう取り組んでいくべきかの提案をする必要があると思います。

このような壮大なテーマを、JUDI NEWS の限られた紙面で扱うのは、若干無理があるかもしれませんのが、われわれも認識し、学んで行くための第一歩として、エコロジーに配慮した都市づくりの第一線の研究者の方々に、問題提起をしてもらうことにしました。これを契機に、今後ともエコロジーと都市環境デザインの関わり方についての議論が継続していくことが望されます。

## エコロジカルな 都市計画の行方

大村 謙二郎

KENJIROU OMURA

建設省建築研究所



都市計画のみならず、世の中の最近流行の接頭辞はエコだ。曰く、エコポリス、エコシティ、エコシステム、エコロジカルプランニング、エコロジカルインフラストラクチャー。軽兆浮薄で、流行に踊らされやすい身であっても、エコといえば何となく免罪されるような状況は少し違和感を感じている。

私の記憶では、都市計画の分野でエコロジーへの関心が高まったのは、これが最初ではない。60年代末から、70年代初頭にかけて、公害による生活環境の破壊が誰の目にも明らかになるほど深刻化し、社会的関心を高めることになった。同じ頃、近代社会を支えてきた合理主義や工業化社会の延長の思考に懷疑、批判の声を挙げる異議申し立ての運動が先進諸国の若者（私もその当時は若者だった）を中心に展開された。ローマクラブの「成長の限界」が出版された時期と軌を一にして、73年末に世界経済に大きなインパクトを与えた石油ショックが起こった。こういった時代環境の中、省エネ、省資源への取り組みが始まつたし、都市計画の中でも身近な居住環境への関心の高まりや、既成市街地の整備にあたっても修復、保全型の道筋が模索されだした。一部のプランナーの間では、都市計画の枠組に生態学的方法論を持ち込むことが試みられた。土地の自然的条件を読み込んだ土地分級論による土地利用計画などは、その先駆的試みであった。1980年に制度化された地区計画へいたる道筋の中には、必ずしも明示的にエコロジーが取り上げられていた訳ではないが、周辺への環境負荷をできる限り抑制しながら良質な環境を形成していくとの計画志向の中には、広い意味でのエコロジー的都市計画に通底するものがあったのではと考えている。

石油ショック以後の公害対策や省エネ、省資源対策の面では日本が最もうまくそれを切り抜けたといえよう。

禍福はあざなえる縄の如し。公害や環境問題の一時的（？）な見事なまでのブレークスルーは、環境、資源、エネルギーの問題についても技術的な楽観主義を生み出し、広範な市民レベルでの生活スタイルの変革には行き着かなかったのであろう。また、ローマクラブの指摘についても身近な生活の問題と地球大の問題との結びつきで捉えられなかつたのではないか。

私は第一次石油ショック以後の1974年から76年にかけてドイツに滞在する機会をもつた。当時、ドイツの都市計画は高度成長期の機能主義や市街地拡大指向型の都市計画からの反省期、転換期に入っていた。歴史的市街地環境の修復・保全や既成市街地の居住環境の漸次的改善への関心の高まり、環境に関わる様々な住民運動の高揚など当時の日本と同質の現象がみられた。公害防止技術や、省エネ技術の面では日本より遅れがみられたものの、その後の環境面での市民意識の高揚と広がり、持続という面では日独で大きな違いが出てきたようだ。70年代末から80年代にかけて市民の

環境＝エコロジーに関心を高める事態が起つた。ドイツ人のアイデンティティとでもいうべき森林が酸性雨で壊滅的打撃を受けたこと、産業革命時代からの古い工場跡地での土壤汚染問題が顕在化してきたことなど。都市計画の権限を持つ市町村の選挙において環境問題や住宅問題が大きな政策イシューとなった。緑の党的躍進はこういった文脈で理解できよう。

ここ数年続けて、ドイツに短期の調査を行っている。その機会にいわゆるエコロジーに配慮したプロジェクトを見ることができた。制度面では、この間に市町村のマスター・プランとしてのFプラン（土地利用計画）と連動して風致・景観計画 Landschaftsplan が策定されることになった。また、都市計画の基本法が改訂され、都市周辺の貴重な緑や自然を食いつぶすことになる新市街地開発を抑制し、内側の既成市街地の再整備に力点がおかれるようになったことなどは、文献を通じてある程度理解していたが、実態はどうなっているのかおおいに興味があった。個々のエコプロジェクトを見ての大ざっぱな印象を言えば、体系的、論理的にプロジェクトを推進しているというより、まずとりあえず、緑を含む自然的要素を取り込むことや省エネ、省資源に効果がありそうなことを試行錯誤的に取り入れている、との感じであった。より印象深かったのは、このプロジェクトに関係するプランナーやそこに住む人々が、まじりを決して、何かを我慢して行動しているというより、別の価値尺度の新たな生活原理を見つけ、それを楽しんで行こうとの、ゆとりある姿勢であった。

こういったドイツの状況をみながら、我が日本のエコロジカル都市計画の行方を考えると、視野狭窄型の技術主義や快楽志向主義から抜け出で、市民と共有できる計画コモンセンスを復権することが必要ではないだろうか。ドイツでも実は、かつて在った計画原理を再発掘し使っているように、日本のきめ細かな土地利用のルールを見いだすことも重要であろう。どこの都市、地区でも汎用可能な計画技術は想定し難い。エコロジーが多様性の存在を前提とするならば、都市、地区の環境を構成する多くの要素の相互の結びつきを発見し、その関係性を豊かにしていく道筋が都市計画にも求められているのでは。



## 建築と環境の関係

小玉 祐一郎

YUICHIRO KODAMA

建設省建築研究所



## 1 いれこの構造

環境は何重もの「いれこ」の構造になっている。建築はその中のもっとも小さいスケールの環境単位を対象にしているといえるだろう。建築は上位のスケールの環境……それはとらえ方によって気候風土であったり、町や都市であったりするが……の影響を受け、また影響を与える。古来、建物のつくりようは否応なく地域の気候風土の影響を受けてきたし、時にはそれが造形的にも機能的にも豊かな地域の独自性を表現してきた。自然条件のみならず社会的な条件についても、もちろん同様のことがいえる。

このような「いれこ」の構造になっているそれぞのスケールの環境の相互関係がおかしくなってきたというのが環境問題に対する多くの人々の基本的認識であろう。それならばその解決法もまた、関係のあり方、つくり方にあるといわねばならない。近代という時代は、生活の利便性をはかり、快適性を向上させるために、資源とエネルギーをふんだんに活用できる技術が出現した時代である。その結果生じる副産物は、より大きなスケールの環境へ次々と捨てられてきたともいえそうである。ゴミも然り、排ガスも然り……。そのつけのとどのつまりが地球環境問題なのではないか。

## 2 建築の環境インパクト

今日の建築と環境の関係にはキーポイントとなる2つの視点をあげることができる。ひとつは環境におよぼすインパクトの軽減であり、もうひとつは親環境的な、親自然的な生活空間の創造である。

前者については詳しく述べる必要もないだろう。建築をつくる時も、竣工して使用しあじめてからも消費される大量の資源とエネルギーをいかに少なくするかが当面の課題である。ライフサイクルエネルギーやライフサイクルCO<sub>2</sub>の概念は、建設が始まってから廃棄されるまでのいわゆる「ゆりかごから墓場まで」の総消費量を評価しようとするものだが、そこでは第一に、建築の使用年数の影響が大きい。スクラップ&ビルトの激しい我国の大都市ではひとつひとつの建築の寿命がおそらく短い。社会的な理由が大きいとされ

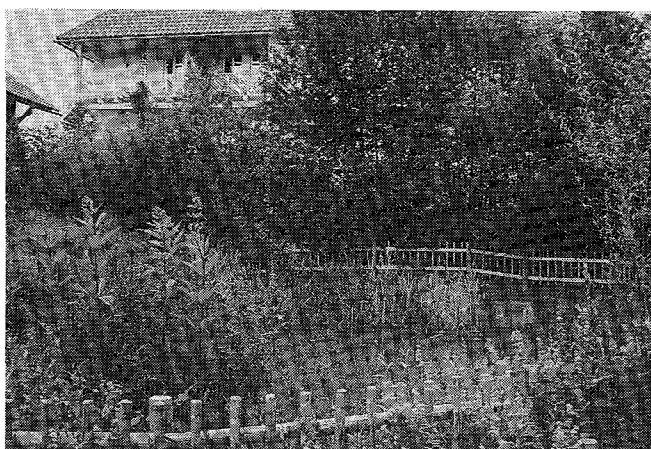
るが、建物自体も長期間使えるように、またリニューアルが容易であるようにフレキシブルな設計が望まれている。CO<sub>2</sub>の評価では木造建築が圧倒的に有利というおもしろい検討結果がある。木そのものが炭素の固まりであるゆえ、全工程をトータルに評価しても発生より固定の方が多いといわれるほど炭素固定効果が大きいとされるのである。

1戸あたりの建設エネルギーが60~120Gcal(少し古いデータだが)といわれるのに対して居住後のエネルギー消費(一般に暖冷房、給湯、照明、その他の設備が対象とされる)は全国平均では1戸1年あたり10Gcal程である。北海道やヨーロッパは20Gcalでこれは主に寒冷な気候のためである。生活レベルを下げないで、いかにこれらの消費を抑制するかがいわゆる「省エネルギー」の目標である。余談だが、別の統計によれば自家用車の燃料として使われるのが一戸平均4Gcal(平均所有台数0.39台として)であるというから、10Gcalと比べてその相対的な大きさに驚く。車を必要としないコンパクトシティの環境改善効果が大きいといわれるのも納得がゆく。

## 3 建築のコンパクト化

暖房や冷房は、大量の廉価なエネルギーが大量に供給されるようになって急速に普及した技術である。単純にこれらの効率をあげようと思えば空間自体のコンパクト化がてっとりばやい。もともと、外界から遮断した空間を力まかせに制御しようとするとする発想だから、「省エネルギー」の圧力がかかるると、断熱化・気密化やらで外部との遮断がさらに進み、ついでに空間自体も小さくなつて閉鎖化がいっそう促進される傾向がある。「いっそ」といったのは、外界の環境が汚染され、そのポテンシャルが低下するほど閉鎖化が促されたというこれまでの経緯があるからで、皮肉なことに今度は環境のポテンシャルをあげるためにさらに閉鎖化しようというのである。宇宙船のようなカプセル住居はその究極の姿であろう。

このような方向は、一般に環境へのインパクトの少ないコンパクトシティにおけるコンパクト住居の必然の方向と考えられやすいのだが、無論、唯一の道というわけではない。コンパクトな住居



住宅団地内のビオトープ（チュービンゲン）



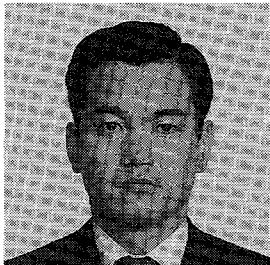
土と緑にうづもれた住宅（ドキュメンタ・ウルバーナ・カッセル）

## エコロジカル・ インフラによる 都市環境の デザイン

並木 裕

YUTAKA NAMIKI

大成建設㈱



のもうひとつの道は、カプセル化とは対照的に、環境に対して開かれた住まいをめざす方向が考えられる。

### 4 環境との共生

現代の大都市をみてみると、緑の減少、空気の汚染、気温の上昇、通風や日照の阻害といった自然条件や、コミュニティやライフスタイルのあり方などなど、選択の余地なく開放化への道は閉ざされ、カプセル化の道のみが残されているように見える。しかし、都市の無秩序な膨張に妥協し、エネルギーによる力まかせの方法で安易に、居住空間の快適さ、便利さを求めた結果が今日の地球環境問題の原因のひとつであることを思えば、そ

うそう簡単にカプセル化を受け入れるわけにはいかない。第一、この種の問題では何より重要となる、人々の環境への意識が、外界と遮断された住居の空間で育つはずがないのではないか。

高密度居住でありながら、社会的にも物理的にも環境に開かれた住宅を可能にする環境共生型の住まいづくりが期待される。その実現は、はなから諦めるほどに悲観的ではないようみえる。自然エネルギーや雨水、中水の利用やゴミ処理などの技術、バッシリソーラー設計術などひとつひとつの技術は着実に蓄積されつつある。これらは、昔ながらのローテク技術と思われがちだが、ハイテク技術の成果であることを強調しておこう。

### 1. 自然に学ぶエコ・インフラ

植物は、根、道管、気孔などで地中の水分を蒸発させ、自然の水循環の一部を担うと同時に植物体自身の体温を調節している。また、根から吸い上げる水分と空気中のCO<sub>2</sub>からO<sub>2</sub>を生産すると同時にCH<sub>2</sub>Oを生産して自らを成長させる。さらに、植物と比べて運動が活発な動物は自分の体内にも循環器を備え、血液などを再生利用することで自然界に迷惑をかけずに種を保存しているように見える。「環」は有限であるが終わりはないように、自然の循環から受ける恵みはサステイナブルな恵みである。都市の装置を動植物の器官と対応させるならば、地球生命体ガイアと共生し、ガイアの循環から恵みを都市に取り込む装置をエコロジカル・インフラストラクチャと呼ぶことができよう。しかし、理想は想定できても現実の都市システムは森のエコシステムのように多様なNEEDSの集合を多様なSEEDSの集合を生かして同時に満たすシステムにはなってはおらず、ヒートアイランド、都市型洪水をはじめとする様々な外部不経済性を顕在化させてしまっている。

### 2. SEEDS が生かされるエコ・インフラ

都市インフラは、単一NEEDSに対応した单一手段として具現化される傾向にあった。一方、一例として、建物屋上の緑化を取り上げると、個々の建物に対しての直接的なメリットの他に、高密度化した大都市のヒートアイランド対策への貢献等も目的としている。この様に「自利利他」を視点とし、既存の都市装置をSEEDSとして見直す発想がエコ・インフラ計画の出発点であろう。NEEDSによる強力な動機付けが無いこれらのSEEDS(因)からの発想は、地域の自然環境特性や社会的、技術的条件(縁)、多面的に生ずる効果の集計(果)、外部経済性や環境影響(報)、即ち、因縁果報の流れの中でその有効性が検証される。

また、自然界の循環との共生を検討することで都市装置としてのサステイナビリティが評価できよう。建物屋上をSEEDSと見れば、どこででも緑が育つ日本のモンスーン型気候と大都市内の緑化スペース不足が「縁」であり、省エネ、アメニティスペース、都市型洪水防止、都市景観の向上、

都市生態系の充実等が「果報」となる。以上のプロセスでエコ・インフラが具現化されるとともに、結果として都市経営収支、地球経営収支の視点からは経済性も高めることになろう。しかし、建物の屋上緑化は地上の場合に比べてコスト増となるため、民間建物を含めて広く普及させるには社会的なインセンティブも必要である。地球環境問題が顕在化し、環境革命とも言うべき改革が必要な今、都市環境デザインにNEEDS系の発想だけではなく、SEEDS系の発想が求められているのではないだろうか。例えば、地球環境問題解決のための大命題である省エネのみをNEEDSとして設定し、対策を求める程、問題を他に転化することにもなりかねない。逆に、結果として地球環境問題が解決されている系をSEEDS系の方法論で構築するべきではないだろうか。

### 3. 総ての人工物をエコ・インフラに

森の生き物達は勝手気ままに活動しつつも、森全体は動的な調和が保たれているように見える。

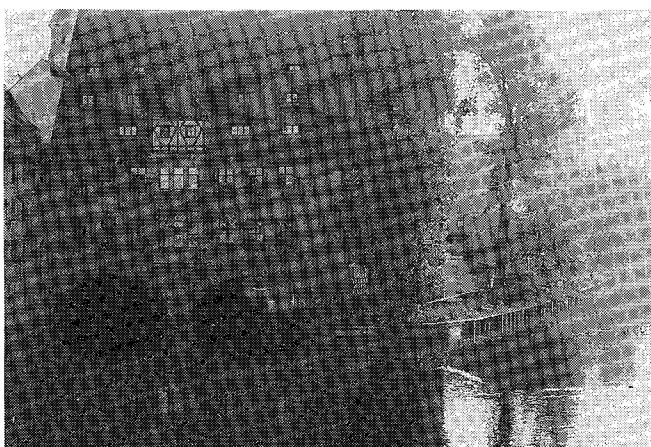
しかし、彼らは、人類だけはつい最近まで現実のものとして認識すら乏しかった、種の保存の危機という潜在的意識を自然界の中で持ち続けたことで、食物連鎖の中で自然と調和できる知恵を獲得し、その結果としてエコロジカルなパラダイムを身につけているとも解釈できよう。ガイアにとって異端とも言える人類も意識改革が必須の時であり、循環と共生、因縁果報、自利利他の視点から総ての人工物をエコ・インフラに、時間をかけて再構築すべきではないだろうか。なお、循環には、水の蒸発と凝縮による空間的に把握できる循環の他に、樹木の一生を物質収支としてトータルするとCO<sub>2</sub>もO<sub>2</sub>もその増減は零となるような時間的な循環がある。したがって木材、木炭などの森林資源の適切な活用は自然環境からの恵みである、化石燃料の保全にもなる。さらに入々が単なる束縛からの解放ではない自由を獲得し、各々の自己実現をめざすであろう近未来の多価値化社会もエコロジカルなパラダイムを要求している。

### 4. サステイナブルな都市環境づくり

都市下水の終末処理場は都市の自前の水が集まる水瓶である。東京の武蔵野台地上の玉川上水路

は晴天時にも機能する不圧地下水の涵養装置でもある。既存の都市装置をSEEDSとしてとらえると、他の都市装置と握手できる手が多く持っていることが認識される。さらに、下水処理場で高度処理される再生水が運河で都市を巡り、中水や熱源水として利用され、水運に役立ち、さわやかな風を運び、運河上に建つレストランの付加価値となり、建物屋上などの人工地盤上の植栽への灌水水源になる。灌水は晴天時に必要であり、その動力にはソーラー発電による直流モーターが使われる。また、台地上の不圧地下水位の上昇に伴い活力を増す木々の維持管理の副産物である、木炭の持つ脱臭効果によって運河には清らかな水が流れます。以上は例示に過ぎないが、エコ・インフラ相

互をネットワークすることで、個々のエコ・インフラが安定的に都市に定着する。水は緑を育て、緑は風を導き、風は水を蒸発させるという相生の循環が、コミュニティ醸成の場としての快適な外部空間を創ると共にサステイナブルな都市環境をつくる。なお、人間にとって害虫とされる昆虫等も生態系全体の安定からは必要であるのと同時に、例えば下水処理場への負荷増となってしまうディスポーザーも、その反面、生ゴミをスラリー輸送で別途処理できることにより、他の資源ゴミ分別と回収を容易にするように、エコ・インフラだけの集合ではなく、一面エコロジカルとは言えない要素をも含むことが、さらに都市環境を安定系へと導く場合もある。



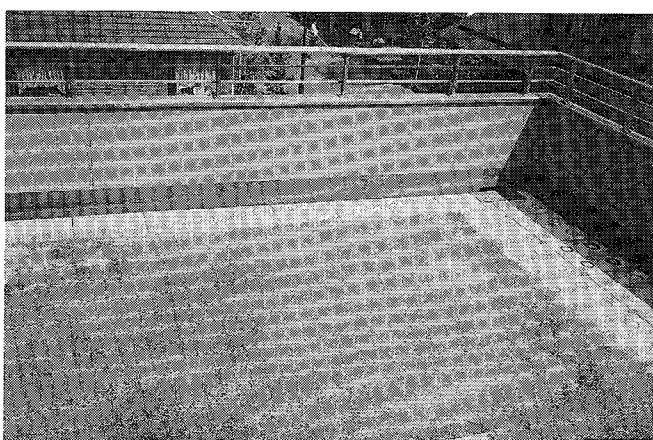
水路とレストラン（ニュールンベルグ）



建物の緑化例（エルランゲン）



真夏の屋上表面温度を15℃下げている芝生



### 九州ブロックからのメッセージ

九州ブロックでは、当会設立後、初めての活動を以下の通り予定しています。

テーマ：「九州の都市環境デザインを語る洋上会議」（仮称）

日 時：1993年 5月28日（金）・29日（土）

メイン会場：博多湾の洋上及び海の中道海浜公園

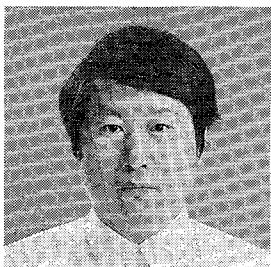
活動の概要： 5月28日（金）夜懇親パーティー

5月29日（土）午前中クルーザーで洋上会議

なお、詳細は、5月初旬に各ブロックの幹事宛てに、案内状を出す予定です。

## エコロジー問題 と都市

北村 真一  
SHINICHI KITAMURA  
JUDI会員／関東ブロック



- 入門文献
- 加藤 尚武  
「環境倫理学のすすめ」  
丸善 1991
- 瀬戸 昌之  
「生態系」 有斐閣 1992
- 本多 勝一  
「日本環境報告」朝日新聞社  
1992
- 日本生態系保護協会  
「日本を救う最後の選択」  
情報センター出版局 1992
- 武内 和彦  
「地域の生態学」朝倉書店  
1991

エコロジーは地球上の物理的、科学的、生物学的に環境全体の物質、エネルギー循環系を解明しようとするものである。とりわけ地球表面の生物圏における生物相互、および物的環境と生物との関係を解明しようとする。

生態系 (ecosystem) は時空間的に 1 つのまとまりとして認められるある範囲の生物を含めた環境全体の相互関係で、都市生態系は都市という地域を、1 つのまとまった関係として把える。

現在話題となっているエコロジー問題は、地球全体を 1 つの生態系として把えた時に、系全体の物質的バランスが変わり、棲息する生物全体勿論人類も含めて生存条件を危うくする方向に向かっているのではないかという予測が否定しえない状況にあることだ。これは人類の活動が極度に活発化し、石炭、石油など地下に固定されていた炭素の使用による大気中への二酸化炭素の放出に象徴されるように、石油文明の環境負担が地球の環境容量を越えて、生物圏の現状での環境バランスの維持ができなくなりつつあることである。

人類は、長寿と健康、安全で快適な生活、豊かな食糧などを求めて、地域の開発や医学をはじめとする科学技術の発展を社会の進歩として是認してきた。自動車や発電所や工場、さらに農業ですら、文明化した技術が地球環境を少しずつ蝕んでいるとは、宇宙から見た地球の映像などからはとても想像できなかった。「地球は無限に大きい」と考え、人類の進歩や幸福の追求をする「人間中心主義」の考え方を暗黙のうちに了解してきたわけだが、それがそもそも問題のようだ。

人類が行ってきた行為は、54億人の人口をかかえ、人類の敵であるウイルスなどの生物を絶滅に追い込み、全ゆる資源を使って廃棄物を出し、全ゆる土地を食糧や生活必需品生産地として使おうとしてきたことだ。勿論野生生物保護区域の保存もしてきたり、廃棄物汚染対策もしてきたが、それでは間にあわなくなったということだ。

こうした人類の行為を品田穣氏は「文明の行きすぎ」と見ている。環境倫理学の立場では、自然の権利を論じ、地域生態系の保全という土地倫理、人類の世代間の持続的生存を保障せよ、地球全体の生態系保全を第一に優先すべき、等の行動倫理規範が論議されている。人類の科学技術のあり方を論ずる思想が現在ようやく問われるようになった。確かに何億年もかけて地球を棲めるようにしてきた生物全体の社会から見ると、数千年前からの地球上での新参者が勝手なことをしていると制裁を受けるということかも知れない。

こうした論議は、有限な地球、自然や生物との人類の共存を前提とした、従来の行き方を変えた、新たな節度ある行動規範をつくらなければならないことに結びつく。ブラジルで先年行動計画の論議がなされたがまとまらなかつた。南北問題ともからみ、国連での難問であろう。先に資源を使い豊かさを実現し地球環境を汚している先進国と発展途上国とで行動規範を合意することは難し

い。「早い者勝ち」や「オゾンホール、砂漠化の進んだ地域の負け」のような環境争奪競争であつても困る。ODA問題も環境とからめたり、国家の買収や環境植民地化などはどう倫理的に解釈できるのだろうか、課題も多い。

さて、都市は人類の発明した生活の道具である。田畠、植林地帯とは異なった道具である。

都市は自然を排除し、人類にとって快適な人工物中心に組み立てられた「人間中心主義」を体現した産物である。安全・快適な社会基盤と生活必需品生産地は「巣」と「テリトリー」と解釈できる。人類社会では役立つか役立たないか、危害を及ぼすか否かで物が分けられる。有用木と雑木、穀物や野菜と雑草、益虫、害虫、雑菌などなど。人類にとって不都合な物は薬殺などをする。

また生活の利便、快適のため自動車など石油を使い、エアコンをはじめ電力を使う。水害防止に堤防、交通に道路や鉄道など、住むための住宅、働くオフィスビルをつくる。精神安定のため緑、花、公園、リゾート地を用意する。都市は人類の楽園を実現したものに他ならない。そして都市で得られる生活、文化こそ人類の究極の目標であった。今さらエコロジーだからと言ってこの生活を手放すことができようかと多くの人は思うだろう。そこに問題があるのだ。

エコロジー問題は、騒音、大気汚染、途上国公害、酸性雨、有害廃棄物、オゾン層破壊、海洋汚染、温暖化、野生生物減少、砂漠化、森林破壊などで、これらの原因は①資源・エネルギー利用、②土地利用配分による。文明の資源の使いすぎや土地の開発のしすぎによる。この二点の人類の生活を見なおすことに解決の糸口を見いだしたい。

つまり、生活水準を落として、人口を減らして、狭い土地で、楽しく生きる世界観を持った、「豊かな生活」をめざすことである。それは少し時代を遡って生活を考えることであり、科学技術の使い方を考えなおすことであり、土地を自然に返すことであり、ゆとりある生活に戻すことであろう。しかし、急激に方向性を逆転するわけにはいかないのが現実であろう。

エコシティ政策では、「都市の持続的成長を維持しながら、自然との共生を図り、環境への負担を軽減したアメニティー豊かな質の高い都市」をめざすことや「省エネ、リサイクル、水循環、気候緩和、風の道」などが提案されている。まだ生活水準を落とさずに、むしろ質をあげてエコロジー対策をという表現になっている。都市環境計画を考えるならば、省資源かつ省エネルギー、廃棄物管理、土地利用の再検討、生活水準と生活間の見なおしが必要であろう。エコロジーは現象の解明が不十分であり、対策技術も未発達、倫理面でも立ちおくれの状況にある。環境計画の必要性は十分すぎるほど認識されるが、その内容にはとても自信が持てないのも現状であろう。

## 六甲23(ヴァントア)

“六甲23”は、明治期の建物にこだわりながら阪神間の住民によろこばれ、灘の地域にふさわしいものを10年以上の月日を重ねながら開発したものである。“六甲23”という名は、リニューアルされた工場・商館が明治23年に建てられたことに由来している。

### 酒蔵の街の新名所

“六甲23”のある神戸市灘区には、「灘の酒」で有名な灘五郷の内、西郷・御影郷・魚崎郷の3つの郷があって、現在も古い木造蔵が多数残っている。

“六甲23”は、これらの酒蔵の街をむすぶ旧西国街道沿いにあり、新しい名所となって賑っている。この道は、歴史的景観を保全する「酒蔵のみち」として神戸市によって整備される予定である。

一方、敷地の北側を通る国道43号線の歩道と植栽も当地の開発に合わせて修景工事がすすめられている。

### 明治・大正期の建物群

オーナーである小泉製麻（株）の前身である都賀浜麻布会社は明治23年に設立され、同年にレンガ工場（第1工場）と木造の商館が建てられた。この時使用されたレンガは香港から輸入されたものである。その後、大正期にかけて、レンガ倉庫及びレンガ工作場が次々に建てられ、現在、その内の5棟を残してこれを積極的に再生、活用している。

### 開発経緯

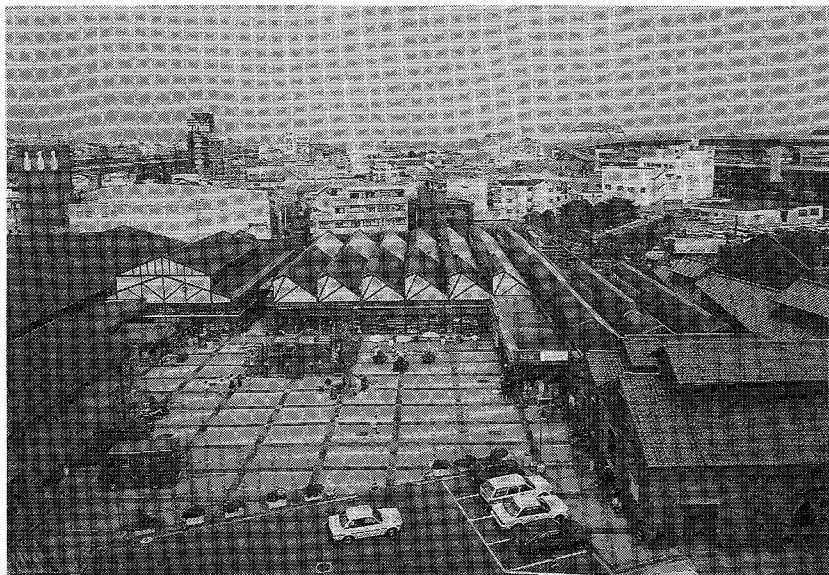
1970年代には、工場の主力は滋賀工場に移り、第1工場が遊休化したので、その再利用計画を提案したのが本開発のきっかけとなり、インテリアマートが1982年3月にオープンした。歴史的建築物を再生し、パティオを中心に抱いた新しい商業空間は阪神間の比較的豊かな住民層に新鮮な好感をもって迎えられた。これは、この後につづく我国の歴史的建築物保全による開発事例のさきがけとして話題となった。

その後、1991年4月に、残りのレンガ建物を利用したレストラン・カフェ・多目的ホールと公園風の住宅展示場がオープンし、一層人々が集いやすい施設群となった。あわせて、旧西国街道に接して中庭を設け、街道沿いには往時の海辺の松林をしのんで新たに松の植栽をほどこすなどの環境整備をおこなった。

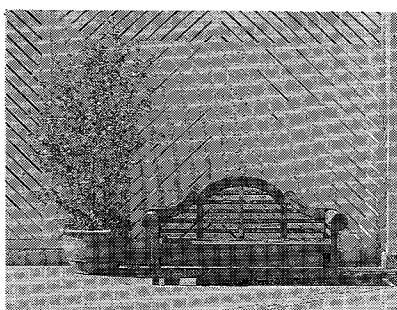
さらに、商館のリニューアルに際しては、酒蔵地区を結ぶ歴史的軸である旧西国街道に面すること、地域（灘五郷）の活性化に貢献すること等により、1階に灘五郷インフォメーションセンターを設け、2階を酒バーとして開発することとし、1993年1月にオープンした。

[井口 勝文]

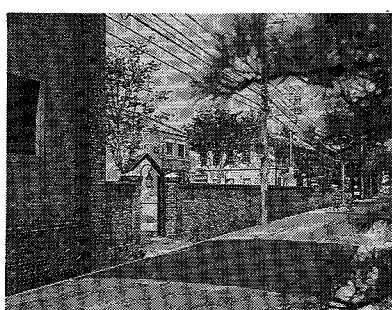
- (5) レストラン（右手前レンガ棟：II期）
- 灘五郷Info.Center & 酒バー（左手奥白い商館：III期）
- カフェ（左手奥レンガ棟：II期）
- 多目的ホール（右手奥レンガ棟 II期）



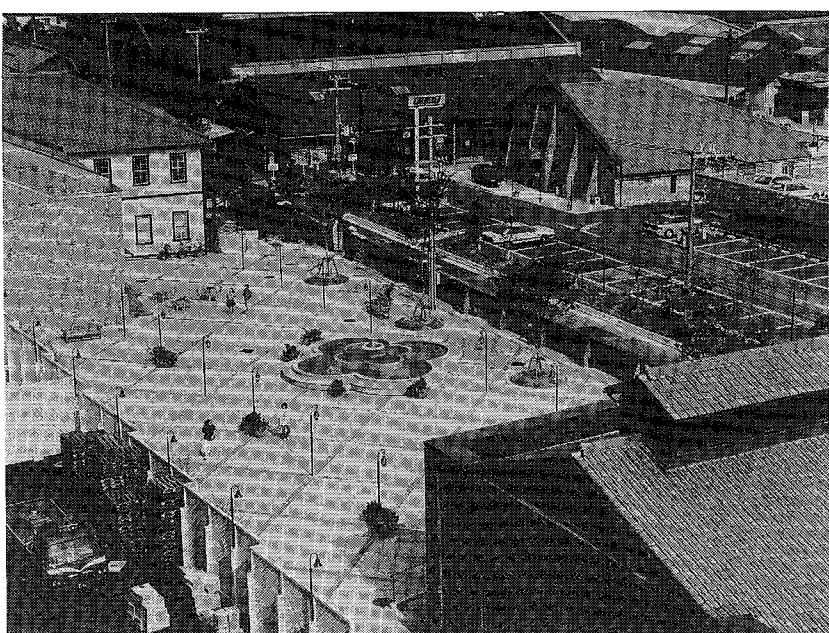
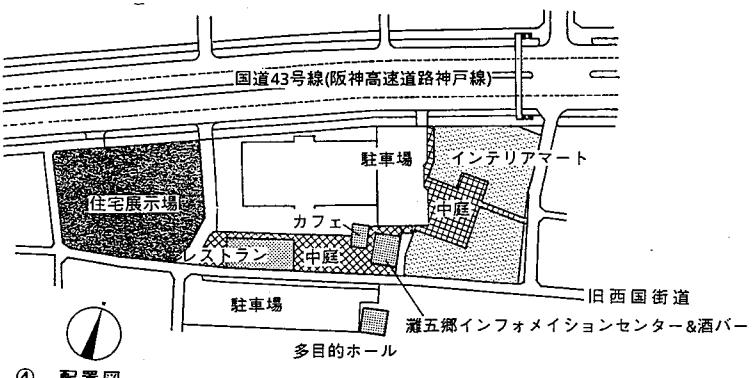
① インテリアマート（I期）



② 中庭のエクステリア



③ 旧西国街道の景観



## 都市環境デザイン／事例シート

### 札幌ロマネット（南2条、3条通）

札幌の都市空間の大きな特徴は明治期につくられた規則的なグリッドパターンにある。その後郊外に向かって漫然と成長を続け、結果的に都心部の都市集積が弱まり、全体として規則的な街路パターンに規定される均質な街並みが形成された。

このような都心に都市としてのめりはりや変化、それぞれの場所性といったものを誘発する仕掛けを考えることが札幌の都市デザインの大きなテーマである。都心部は現在都市更新の過程にあり、屋外駐車場などテンポラリーな土地利用が目立つ状況であり、町並み整備の促進材料として街路整備の先導的役割は大きい。

そのような考えに基づいて札幌都心部街路整備計画（札幌ロマネット---都心の顔づくり---）では南2条通、南3条通の西4丁目、5丁目の2区画の歩道空間整備を進めた。ペーブに関しては場所性を演出する仕掛けとして、札幌の規則的なグリッドパターンに世界の代表的なグリッド都市のパターンを重ね合わせ、それによって生じる不規則なパターン変化をデザインモチーフとした。

ストリートアーティキュレーションは通りごとに異なったデザインを用いたが、街灯については器具自体を個性的にデザインするのではなく、二重反射板やパンチングメタルのスリットを活用し、光の拡散、集積による光の広がりに個性を持たせた。

〔柳田 良造、石塚 雅明〕



写真左上／バルセロナのグリッドパターンを  
ペーブのデザインモチーフにした南3条通  
写真右上／ポートランドのグリッドパターン  
を用いた南2条通  
写真左／二重反射板を活用した南2条通の街  
路灯

## 都市環境デザイン／事例シート

### 南塙口まちかど広場

尼崎市では、市街地に点在する市の公共施設の敷地を利用して、そこに憩いの空間をつくり出すとともに、魅力ある都市美の形成と地域コミュニティの醸成を図るために、みちすじ・まちかど整備事業を実施してきている。本事例もそのひとつで、平成3年4月に完成了。

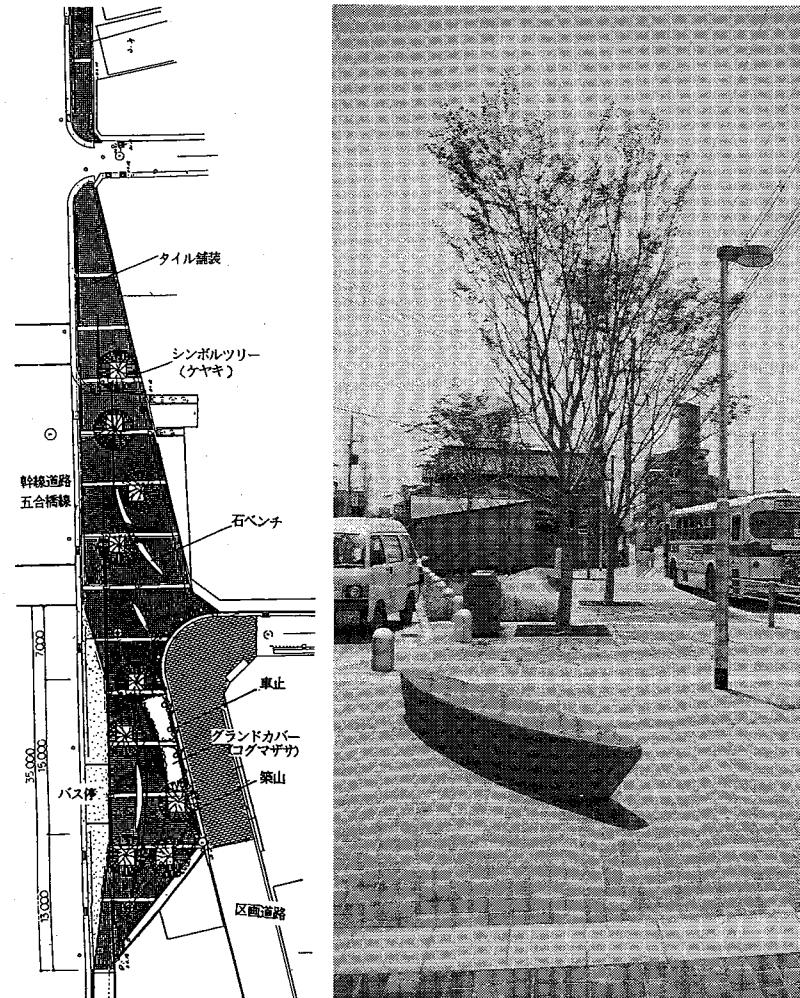
まちかど広場のある南塙口地区は、阪急塙口駅の南に位置し、周囲を幹線道路に囲まれた通過交通の多い地区で、昭和50年度より居住環境整備事業を実施している。（対象地区面積82ha）

この事業は地区内の道路を体系化し、総合的な整備を行う都市計画道路事業で、X型交差点、T型ネットワーク路、クルドサック等の道路形態の工夫や交通規制等による居住環境の改善が進められている。

本事例も五合橋線とY型に交差する区画道路の変則的な交差点を廃止することで、地区内への通過交通を排除するとともに、幹線道路の広幅員の歩道として広場的に整備している。

タイル舗装を盛り上げて築山とし待合の空間を領域化することで、南に離れていたバス停を取り込んでいる。また、アールのついた石ベンチや車止め、シンボルツリーのケヤキ、グランドカバーのコグマザサ等が空間に親しみのある表情を演じ出している。

〔白井 治〕



## 関東4ブロック 第3回・4回合 同例会報告

天野 光一

KOUITI AMANO

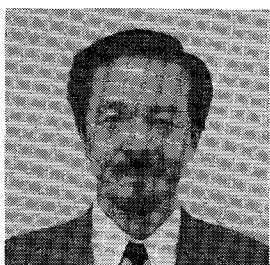
関東ブロック幹事



伊藤 洋

YO ITO

関東ブロック幹事



12月14日に「ヨーロッパの河川リゾート」をテーマとし、第3回例会が開催された。発表者は東関東ブロックの日本大学理工学部交通土木工学科天野光一である。発表及び議論の内容は以下のようであった。

都市的なレベルで水辺を楽しんでいる事例として都市内の水路がある。ユトレヒト、アムステルダムなどにみられた。水辺での活動が快適に行われるようストリートファニチュアはもちろん、水の流れを美しく見せる堰の天端のデザインなど細部に至るまでの配慮が行われている。D/Hの小さい比較的圧迫感の強い都市内において、水の存在する重要なオープンスペースとして水路の存在している空間が取り扱われている。アムステルダムやパリでは水路を遊覧する船があり、その中で食事のできるような楽しみも準備されている。アムステルダムでは観光船を始めとした様々な水を楽しむ観光的利用が行われ、水辺においても様々な利用が行われている。我が国の湖沼でも同様な目的の整備が行われているものの、前述の都市内における水の扱いから始めて様々な部分でのデザインのレベルの差があることが感じられた。

地方部ではミューズ川のナミュール地方（ナミュールからディナン）のように自然で美しい川に沿って別荘や住宅があった。その住宅も川に接しており、家の中から川が望めるとともに家のすぐ

1月25日、「テーマパーク型街づくりについてもっと語ろう」と題してクロストークが行われた。問題提起と話題提供は、土田旭（株都市環境研究所）、桜井淳（株桜井淳計画工房）、加藤源（株日本都市総合研究所）の3氏。

「テーマパーク型」の命名はレム・クールハースが、S. F. ミッションペイのヴィクトリア調のデザインガイドラインを「テーマパークをつくりようとしている」と批判的にコメントしたことによ来している。本会でこの名を使うのは、ギリシャ風の街づくりの大倉山エルム通り、群馬県渋川、大曾根オズモールなどをその視点で論じたいという問題提起である。

「テーマパーク型」とは、強引に断ずればその地区的な生活に関係なく、デザインガイドライン又はデザインコードで建物のファサードを統一する街づくりのタイプである。

1. テーマパーク型街づくりの背景、その存在理由などを別途の問題とすると、

- ① デザインを統一すべきかどうか
- ② 統一のレベルをどう抑えるか
- ③ 直接携わる当事者として、都市デザイナーと建築家とはどう折り合うべきか、あるいはどう対立し合うべきか

などの問題がある。

デザインの統一とレベルについては、建築家の自由をもっと不自由にすべきだとの意見が、建築家への問い合わせの形で出された。逆に大倉山の協

定傍でボート遊びや釣りなどが楽しめるものとなっている。ディナンより上流（レッセ川）ではカヌーによる川下りが楽しめているが、カヌーの貸出、上流へのカヌーの陸路運搬という川の楽しみの支援システムがあった。

より広域の楽しみ方として、川や運河をクルーズするという楽しみがヨーロッパでは非常に一般的であった。クルーズを保障する静水面の確保のために、ロンキエール、ルビエールなどの大規模なボートリフトも整備されており、各所に閘門が整備されている。また、クルーズする船の停泊地では別荘やレストランなどもあり、航行していく船を見る楽しみも保障されている。特に興味深かったのは、高速道路のサービスエリアと運河の停泊地を一体に整備したポートローラジエである。我が国でいえばハイウェイオアシスにあたるもので、同様の整備が可能であると考えられる。

以上、例会で興味のもたらされたことのみ紹介してきた。この例会では必ずしも議論を収束することを狙っていないため総括することは難しいが、その整備を担当する公的セクターの人間が頑張ることも重要であるが、都市環境デザイン会議のメンバーを始めとした計画設計に関わる者が、かなり頑張らないと我が国の質の高い河川リゾート整備は難しいということになったと考えている。

定には、建築家に言わせると、とんでもない強制が書かれているという意見。他に異論として、街は統一されずいろいろあって面白い、という意見も出された。

2. 街づくりを街の活性化とする時、テーマパーク型街づくりはそのハード面となるが、

- ① ハードでの街の活性化は可能か、東京D.L. やハウステンボス位まで徹底する以外は、活性化は無理ではないか
- ② 逆にテーマパーク型街づくりは、業種構成のうえで制限が厳しい

など、警告に近い指摘があった。

3. デザインガイドラインなどに対するデザイナーの姿勢・資質については、「行儀作法論」として

- ① 我こそはという建築家が参加・競演する街がめちゃくちゃになりはしないか（笑）
- ② 行儀の範囲は街が決めて、デザイナーに示すものではないか

などの問題が出された。

4. ガイドラインなどでレジャーランド的な街ができるもいい。ただしそれに我々都市デザイナーが関係するとき、どう考えるかが問題であろう。

5. 専門家間での折り合いについては、建築家との議論が「行儀作法論」を含めて必要だろう。

テーマは大きく、限られた時間で論議が尽くせなかった。関東ブロックでは、継続してテーマ展開し、例会を重ねる予定である。

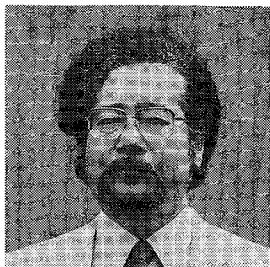
## ブロック例会レポート

### 関東ブロック・ 都市環境デザイ ンセミナー報告

鳴海 邦穎

KUNIHIRO NARUMI

代表幹事／関西ブロック



#### 日本の都市空間のめざすべき 方向

：民族的市街地空間あるいは  
エスノ・スケープを巡って

1993年の第1回目の関西ブロックセミナーとして、2月17日、表記のようなテーマで座談会を開催した。座談会では、まず鳴海が問題提起を行い、小林、材野、長谷川からのコメントが述べられた。さらにこれらをふまえ、参加者の討論参加があった。

#### 日本都市の特質

ある都市計画家が、ヨーロッパ、U.S.A.、日本の都市の特徴について、次のように表現している。  
<貝殻として積み上げていくヨーロッパの街><動く風景として時の変化に不断に対応していくU.S.A.の街><確たる方針のない日本の街>。

ところで日本の都市はヨーロッパやU.S.A.の都市に比べて遅れているのだろうか。日本の都市は、ヨーロッパやU.S.A.の都市とは異なった、固有の性質をもっている可能性がある。日本の都市の将来を考えるために、日本都市の固有性を明らかにする必要がある。こうした固有性を、民族的市街地空間あるいはエスノ・スケープと呼ぶこととしたい。

#### <幼い>都市の魅力

日本を訪れた外国人は日本都市をどう見たであろうか。フランス人のブスケは、明治の初年の東京の印象を次のように語っている。

「（東京を訪れるにあたって）ひとは少なくとも一個の壯麗な都、巨大な門、壮大な様式の街並みや橋を見いだすものと期待する。しかし、……木造の低いそして古くなって黒ずんだ家が立ち並び、時々空地を通りぬける不斬いの道を走りまわるとき……何という裏切られた気持ちになることだろうか。（日本見聞記）」。

東京の街並みに裏切られた、というもの、次第にそのよさが見えるようになり、ブスケは、さらに次のように述べている。

「あちこち歩き回っても倦きないのはどういうわけだろうか。それは、都會がその乏しい小さな家の、単調でありふれた外觀の下に、限りない変化を与えられているからであり、またそこで人に知られぬ絵のような何かの場所を毎日みつけることができるからである（同前）」。

ブスケは、街の活動の木目細かな表情や風景にひかれたのだ。しかし、ブスケは、こうした魅力を、<幼い都市>の魅力としてみており、<もうひとつつの都市のあり方>とはみていられないようだ。そのことは、次の文に表れている。

「民衆はこのように幸福であったが、西洋が彼らを締めつけている。勤勉な労働の必要がヨーロッパという競争相手とともに入ってきた。幼年時代の気楽な楽しみよ、さらば。苦労の多い時代が遠からずやってくる（同前）」。

ブスケの<幼年時代>という表現は、当時の東京の社会そのものについていっているわけだが、都市の空間的な側面に対する評価とみてもいいだろう。<幼年時代の都市>とは、近代化を尺度に考えれば<遅れた都市>ということになろうか。こうした認識は日本人自身ももったところであり、そのため、長い間、日本の伝統的な町並みになかなか自信がもてなかつたことも事実である。  
細部に宿る京都の魅力

ブスケが東京の印象記を書いてから、もう百年以上も経った今日、ブスケの印象と非常に似通つ

た記述を発見することができた。もう20年以上も日本に住んでいる、アラン・ブースというイギリス出身の文筆家の記述である。「京都はどの視点からみても（中略）その醜悪さに泣けてくる。

（中略）魅力……魅力があったとして……は、それらが内包するものにあるので、眺望にあるのではない。京都が“美しい”のは、その中に美しいものがあるからだ。まわりの不協和音に抗（あらが）うように存在し、発見するのに一生かかるかもしれない、えもいわれぬ、ときには小さな細部があるからなのだ（津軽）」。

かってブスケは<限りない変化>や<人に知られぬ絵のような場所>に引かれ、今日のアラン・ブースは<内包された美しさ><美しい小さな細部>に着目している。こうした特徴は確かに日本の都市の特徴であり、わたしたち自身が日本の都市を楽しむ視点を確かにとらえている。

#### 西欧建築に脆弱な東洋の風景

わたしたちがアジアの多くの地域で見出すことができる町の魅力もまた、濃やかな風相（ふうあい）にも似た魅力である。それは人びとの手の技が作り出したものであったり、町の中に織り込まれた自然がもたらしてくれる良さである。

こうした魅力を生み出している条件のひとつが、気候的な条件である。これらの地域では植物の繁茂する力が旺盛で、農業の主体は水田稲作にあり、水を扱う秩序だった仕組みをベースに、農村地域の木目細やかな風景が形成されている。

こうした土地の生産性の高さは、都市の景観にも現れる。つまり、狭い土地でも耕作が可能だから、農地と市街地とがモザイク状に混じりあった景観をもたらしたり、市街地のなかに細かな緑が点在する景観をもたらすことになる。

わたしたちがこうしたアジアの都市を見るにあたって、ブスケと同じような目でみていいだろうか。それが一種の困惑をわたしたちにもたらしている。つまり、東南アジアの都市を<幼い>と感じる、と同時に、近代的な日本の都市との同質性を感じてしまう。それに合点がいかないのだ。

建築家の原広司は次のように述べる。

「東洋には、もともと（西欧建築による風景の）破錠をゆるすような空間の組み立てがあるのではないかだろうか（集落への旅）」。

この<破錠のしやすさ>を、どうとらえるべきなのだろうか。それは<幼い>とか<遅れている>から生じるのだろうか。わたしは、アジアの生活空間の仕組みは、ヨーロッパ的な近代化とは不調和であり、脆いかもしれないが、それは決して<幼い>ものであったり<遅れている>ものではないよう思う。むしろそれは、ヨーロッパ都市とは異なった、<もうひとつつの都市のあり方>であり、<破錠のしやすさ>は、それに見合った近代化のあり方を探しあげているためではないだろうか。

### 小林郁雄（コープラン）

自分の仕事の姿勢として、次の2点には共感を覚える。1つは、農村風景についてで、東洋の稻作文化圏における湿った風景は、非常にわかりやすい。これは、日本の都市計画において完全に欠落していた部分で、特に、景観問題を考えると、農村風景の方がはるかに上等であるように思う。

二つ目は、中部ヨーロッパの都市には均整のとれた美しさがあるが、最近都市空間像が自分の仕事のゴールであるという気があまりしなくなってきた。その中でどういう生活が展開できるか、住んでいる人がどういった形で生活を持ちうるか、ということ、私たちがすべきことではないかと思っている。

### 材野博司（京都工芸織維大）

江戸から近代に入った時に、建築が急激に変り、それが江戸的な都市の容貌を変えてしまった。しかし、町割というのは意外に変らず、たとえば、京都の町割の枠組みは、私たちの生活を強く規定している。つまり、大きな枠組みとしての、町割、昔の都市のグランドデザインが大きく私たちの生活を規定している。そして、インテリアの狭いところに、フツフツと私たちのデリケートな伝統が残っている。

都市の年輪という発想はどうだろうか。中心部が近代化し、そして、近郊住宅地がまた近代の顔を持っている。私は、それに挟まれた中間ゾーンに、可能性のある区域が残っていると思う。

### 長谷川弘直（都市環境計画研究所）

これまでの経験から、都市デザインにおいて取り組むべき方向は大きく2つあると感じている。ひとつは、都市というのは、ほとんどが、パブリックな空間でできあがっているということだ。パブリックというのは、複雑怪奇で、政治的背景などをもちろん都市を規定していく。もうひとつは、町をつくるしくみに関するものである。さまざまな意見や生活をもつ人びとの中で、自分のアーバンデザイナーとしてのコンセプトを主張し実現していかなければならぬ。

現在の大都市の住民の多くは、地方出身者である。彼らは都市に経済機会や娯楽を求める同時に、都市の中に農村風景を求め出すなど、非常にわがままな都市住民になりつつある。また、建築家達は、建築の造形言語をあまりにも都市の中にばらまきすぎているように思う。

こうした中で、私たちが取り組むべきは、やはりパブリックな空間づくりだと考える。

### 久保光弘（久保都市計画事務所）

日本では、都市を見る視点が100年くらい切られているように思う。特に関西の街にある風水的なコンセプトを知るにつれ、そうした思いがつのる。アジア的な環境意識からすれば、新しい京都駅のデザインは解せないことになる。風水思想からいうと、そこに壁をつくると、エネルギーがストップしてしまう。

東アジアでは、環境デザインに関するイデオロ

ギーが形成されてきた歴史がある。これをもっと深く見つめるべきではないか。

### 丸茂弘幸（関西大）

私は、ヨーロッパも悩んでいると思っている。ヨーロッパの都市というとき、私たちは新しい町をイメージしないで、歴史的な部分を頭に描く。ヨーロッパ都市では、中心に歴史的な地区が残っているが、郊外はほとんど無性格で、日本やアメリカの郊外地とほとんど変わらない。

果たしてこれでいいのだろうか。彼らも、かつてあったような町をつくれないことを悩んでいる。近代化は民族的なものを払拭してきたが、結局、ヨーロッパ自体も近代化で苦しんでいる。

### 上野 泰（ウエノデザイン）

都市がみえるかみえないかという話があったが、それは、誰にとって、都市のどの部分が見えるのか、という問題ではないか。そこで重要なのはインフラの問題である。インフラが明確な都市は、地球上でいえば、極めてローカルな都市ではないだろうか。ヨーロッパでも、インフラをつくってきた為政者と、それに支配されてきた人たちというふうな構造があったように思う。つまり、都市が二重構造をもっているということである。これが都市の地域性と関連しているように思う。

### 佐々木葉二（鴻池組）

今日の話の中で、エスノ・スケープが話題になつたが、失った風景を都市の中に再び持ち込むべきである、という結論に落ち着いてしまうことが多い。それは大都市の多くの人にとっては農村的な風景であり、幼年時代の原風景である。このことから考えなければならないのは、なにが原風景なのかということだ。つまり、どの時間帯の時間の厚みで都市と接していたかということだ。

しかし、時間の厚みのある時間帯をほとんどもっていない人たちが、今、都市を設計していることに問題がある。濃厚な厚みのある時間的な風景を体験しなければならない。

### 下村泰史（住宅・都市整備公団）

歴史的な方向からのアプローチもあると思うが、もうひとつライフスタイルのありようから、析出させていく必要もあるように思う。それにしても、あまり楽観的にはなれない。つまり、私たちのような一般の消費者がどんなものに囲まれて暮らしているかというと、大量に生みだされる工業製品に囲まれ、固有性がどんどんやせほそってきているのではないか。そういうできあいの生活物みたいなものだけで、町がうめつくされていくとしているのではないか。

それに対抗するために、都市デザインがなにをしたらいいのか、もっと論じられなければならないと考える。こうした生活者からの視点から論じないと、舗道をブロックでうめて、モニュメントを建てるのが、都市環境デザイナーの仕事だということになってしまいかねない。

## 代表幹事会より

- 1 第3期総会の開催について  
第3期総会を以下の予定で開催します。  
日時：7月23日（金）午後1時～2時  
場所：シーフォートスクエア UBERビル（予定）  
同日午後2時半～6時半（予定）にモニターメッセ'93を、また、午後7時～8時半（予定）に懇親会を開催します。多くの方が参加できるよう、今からスケジュールを空けておいて下さい。
- 2 名簿の変更について  
6月末に新しい名簿を発行する予定です。住所や所属の変更、間違い等がある方は、5月20日までに事務局へ連絡して下さい。
- 3 協力法人  
名古屋市が行政組織としては、初めての協力法人になりました。今後も都市環境デザインへの行政の関心が高まることが期待されます。

## 事務局より

中村 和泉

### 1 新会員の紹介

1993年2月1日～1993年3月31日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）  
3/31現在の会員数は366名です。

氏名	勤務先
河本 一行	（株）シェラプラニング
平井 康幸	（株）新井組
正木 勉	日本軽金属（株）
遠藤 充彦	（株）エルデーヤマギワ研究所
福本 康資	（株）博報堂 大阪支社
丹野 亘	（株）都市総合計画
波木 健一	（株）福山コンサルタント
澤 一寛	（株）日本カーテクロジー 研究所

## 編集後記

- エコ「特集」では会員外の方を中心に執筆をお願いしました。今後とも、都市環境デザインを外からみた視点で、考え方直してみることも必要ではないかと思います。
- 九州ブロックから洋上会議という、楽しそうな案内が飛び込んできました。ブロック例会レポートに関東・関西以外の報告がそろそろ載ってきそ

## 「都市環境デザイン・セミナー」開催のご案内

### 第一回 都市環境デザイン・セミナー 「大谷幸夫先生と都市環境デザインを語ろう」

日時：1993年5月21日（金）午後6時～8時半  
場所：津田ホール会議室（千駄ヶ谷駅前）  
長年にわたって建築、まちづくりを通じて都市にかかわってこられた大谷幸夫先生を迎えて、会員諸兄との対話形式で以下のようなテーマについて、フランクに語り合いたいと思います。  
○わが国のアーバンデザインの実績と教訓  
○都市環境デザインとは何お守り、何を抛り所すべきか  
○若きデザイナーに期待すること  
めったにない機会です。ふるってご参加下さい。  
JUDI研修研究委員会

### 2 住所変更等（敬称略）

氏名	変更内容
大山 雄三	（株）ES計画室 TEL 〒541 大阪市中央区本町3-5-5 TEL06-262-7251 FAX06-262-7253
西端 義信	（株）都市環境デザイン 〒541 大阪市中央区平野町2-3-12萬里平野町4F TEL06-232-1582 FAX06-232-1594
福沢 健次	（株）ニチ 設計・計画 千石事務所 〒112 文京区千石4-37-4 千石ヨートハウス1B TEL03-5395-0165 FAX03-5395-0168
星山 耕一	（有）オカルトランドスケープデザイン 〒390-02 長野県松本市入山辺 1475 TEL0263-32-5716 (FAX同)
宮前 保子	（株）スペースビジョン研究所 〒550 大阪市中央区谷町2-8-1 大手町M <sup>2</sup> ビル TEL06-942-6569 FAX06-942-6897

- うです。各ブロックのみなさん期待しています。  
●事例シートの出来はいかがでしょうか。少しずつ充実していきたいので、素材の提供をお願いします。  
●年度末の一番忙しい時期に編集担当に当たってしまい、予想していたとはいえ、結構つらいものでした。  
【沢木俊岡】

### 広報・出版委員会

小林郁雄 林 泰義  
沢木俊岡 宮前保子  
土田 旭 森 延彦